

## 風土が作る文化：文化景観としての石垣

著者	漆原 和子
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	2
ページ	127-149
発行年	2005-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022569">http://doi.org/10.15002/00022569</a>

# 風土が作る文化

## —文化景観としての石垣—

漆 原 和 子

### 1. 日本の風土が作る文化景観

風土の認識は、実に幅広く多岐にわたっている。したがってその捉え方は自然科学ばかりでなく、人文科学、社会科学の幅広い分野にまたがっている（和辻、1969、吉野、1979）。この研究では、風土を以下のように定義し、取り組むこととした。

風土とは、1) ある地域における自然条件であり、2) そこに住む人々がその自然条件を受けとめ、何らかの工夫をし、あるいはその自然条件に順応し、生活し続けている状態である。3) その結果、それぞれの地域に固有で、他の地域とは異なる風土が形成される。以上のように考え、地域差をもつ、文化や景観とその自然条件との関係を見ることにした。

文化景観の地域差を取り扱った研究はきわめて多い（佐々木、1978）。地理学ばかりでなく、文化人類学、考古学、民俗学、宗教学、建築学など多数の分野で研究が行なわれている。有形、無形の文化の実態そのものの解明は、多くの研究者のテーマである。この研究では地域差のある自然条件のもとに、人々がどう工夫し、住んできたのかという視点から、そこに生じる文化景観の差を明らかにしようとするものである。

今世紀に入って、ヨーロッパの文化を「石の文化」、アジアの文化を「木の文化」と呼んで、両文化を対比して論じる比較文化論が展開されている。たしかに、宗教建築物、民家の建築材料、牧場の境界を形成する牧堤の材料などには、ヨーロッパでは石材が多く用いられ、アジア特に東アジアでは木材が多く用いられている。景観としての違いは明らかではあるが、しかし、それぞれの

文化形成との関わりについての分析は充分とはいえなかったと思われる。例えば、ヨーロッパにおける牧畜業に対比できるものは、東アジアでは稲作農業であるが、それぞれの地域で人口が集中する地域の気候条件や地形条件によって、利用可能でかつ必要となる主たる建築材料は異なってくる。質的な差を量的に裏づけて考察しなければならないが、この点がマクロの比較文化論ではこれまで欠けていた。

一方、文化景観には新しい動きが最近起こってきた。世界遺産の指定など広く保存、保護がうたわれるようになり、世界的にも関心が高まっている。また、日本でも各地の市町村で町並み保存、保護がさげられるようになってきている。ここでは町並みや景観を作り出す要素の一つである、住宅の外観を囲う石垣の形式の地域差を明らかにすることによって、この活動に貢献できる。文化景観は、風土がつくるものであるとすれば、その地域差に特有の文化景観は遺産として重要であるからである。ここにもその研究の意義がある。歴史的に地域間で人々の交流があり、文化や技術が交流し、混合してきた。例えば、歴史的には政治の境界の変遷も大きな要因であった。

近年の日本の景観保存に関わる事業は、1960年代末から始まった。大城(1995)によれば、歴史的景観整備の事業は文化庁が「重要伝統的建造物群保存地区保存事業」をはじめ、建設省は「歴史的地区環境整備街路事業」、運輸省は「歴史的港湾環境創造事業」として取り扱ってきた。それぞれの省庁は以下のような事業を立ち上げてきた。主なものをあげれば、

1989：文化庁「史跡等活用特別事業」

1993：建設省「街並み環境整備事業」

1993-95：自治省「ふるさとづくり事業」

1994-96：農林水産省「新・美しいむらづくり特別対策」

町なみや棚田のような農村景観の保存から、農家の母屋、蔵、生垣、門、塀、屋敷林に至るまでが対象とされている。また、建設省の「歴史的資産」の保全、活用対策の調査(1990)の調査対象分類表には、都市、河川、道、建造物、町並み、生家、名所、遺跡があり、主な事例の中に、城の石垣や、武家屋敷、民家などの塀、門、石垣、屋敷林なども対象となっている。この研究で取り扱う石垣も文化景観を保護、保全する立場から、重要な事例として扱われている。

イギリスでは、景観に対する取り組みは日本に比べて早くから実行された。景観保全のため、ロンドンでは1938年から建造物の高さの規制が設定されていた。それは大聖堂がどこからでも見えるようにという、一種の景観保全の意味も込めている。歴史的建造物の登録制度の考え方が初めて法律の中に導入されたのは、1944年の都市農村計画法であり、まちづくり制度の一環として、地方計画当局が建造物を登録する制度ができた。1967年には、歴史的環境を面的に保全するため、保全地区（コンサベーション・エリア）の制度ができあがった。1967年は4地区だったのが、1994年当時は7,500地区を越えた。

以上のような種々の観点や背景を考慮して、本研究では「風土が作る文化景観としての石垣」をテーマとして、風土学の立場から以下のことを解明することを試みた。ここで、問題設定は次の通りである。

- (i) マクロの比較文化論では、「木の文化」とされる東アジアにおいて、ローカルまたはミクロに見た「石垣」の文化景観としての意義や価値は何か。
- (ii) 研究対象とした「石垣」を取り巻く文化景観の地域性を明らかにする。東アジア・東南アジアにおける石垣の分布範囲は何によって規定されているか。
- (iii) 九州・沖縄または中国・韓国などとの石垣の技術・形式の関連性の有無。
- (iv) ミクロに見た「石垣」の歴史的な実態はどうか。歴史的遺産としての価値は何か。
- (v) 日本文化における石垣景観の意義は何か。

以上である。

今回の報告では、2.に述べる知覧と坂本の例は上記の（iv）に対する詳しい調査結果である。3.1では上記の（iii）と（iv）について、3.2では上記の（ii）および（i）の検討結果を述べたい。

## 2. 文化景観の一例としての石垣

### 2.1 知覧における屋敷囲い

鹿児島県の知覧は薩摩藩の外城として、島津が守りを固める位置に設置されたといわれていて、知覧島津（佐多）氏は忠光（～1363）に発するとされている。薩摩藩では外城は合計113ヶ所あった。このうちの規模の大きな外城の1

つが知覧である。現在も当時の武家屋敷跡の一部がほぼ完全な形で残されている。武家屋敷のある一角の通り（本馬場通り）の道路面は、原地形面より約1.2～1.5m深く掘り下げてある（図1）。それぞれの武家屋敷は、本馬場通りに向き合って両側に分布する。屋敷の門の間口はどの武家屋敷も約3.6mあり、母屋へは石の階段で上がっていく形式となっている。

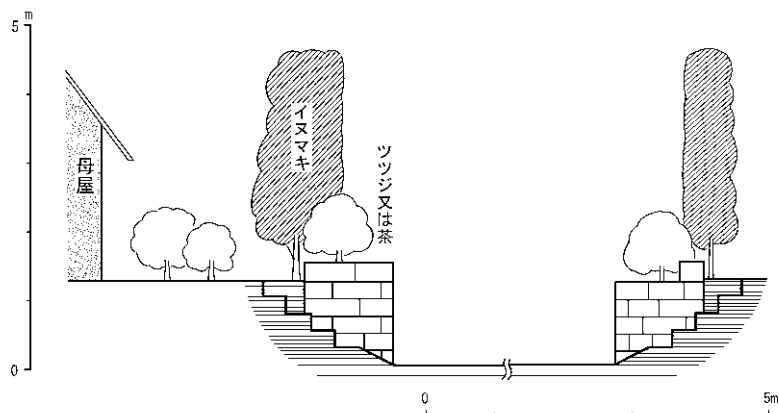


図1. 本馬場通りの横断面図。道路幅約5m。道路の掘り込み1.2～1.5m。

屋敷囲いとしての石垣は、玄関脇と、屋敷の道路に面した塀の部分のほぼ99%が、凝灰岩の樵石を用いている。一部に河床礫または段丘礫と思われる野石を用い、土で目詰めをし、固めた石垣を持つ屋敷がある。野石は円形度が高く、凝灰岩とチャート、砂岩からなる。これらの石材はすべて、あまり遠くはない距離の地域で入手できる石材ばかりである。また樵石の大きさの最も大きいものは、幅80～120cm×縦30cm×奥行き20cmが多く用いられている。知覧町文化財課の若松学芸員によれば、「今も町内に凝灰岩の石切場が残っている。1600年代初めの屋敷群の絵図があったことになっているが、現存していない。また、玉石は麓<sup>ふもと</sup>川上流から採石してきており、それぞれの屋敷の庭園も含め、地割りができたのは1750年代であった」という。

武家屋敷の屋敷囲いを作る石工がいたのか、当時ユイで作業をしたのかは現

在不明である。それは、大正3年（1913）に武家屋敷の半数が火災にあったので、古い文書が多く失われていて、現在詳細は不明であるからとされている。今は、石工はいないが造園業者が石垣の石積みもするし、その内側の生垣も手入れしている。ここでは台風などの防風と防火を兼ねて石垣をつくった。石垣部分は1.2～1.5 mまでの高さに定めていて、石垣の上に積み重なって見えるよう内側から植えた生垣も見せることが、もう1つの目的である。生垣には、どの武家屋敷も火に対して強いイヌマキを用いているが、木が大きくなると足元に枝が張らなくなり、すくので、その前面にお茶の木、ツツジなどの灌木を植えて、隙間のないように垣根を仕立てる（図2）。本来は防御目的もあり、道路を少なくとも1.2m掘り下げ、敵が道路を通過したとき、屋敷側から攻撃するために設計された武家屋敷群である。今日では、むしろ、台風などの防風の役割を担う生垣と石垣からなる屋敷囲いである。一方では外からの視線を遮るためと、内側からは庭園の遠景として、高い刈り込みの生垣の裏側に相当する



図2. 本馬場通りの石垣。隅角に見られる樵石の算木積み。

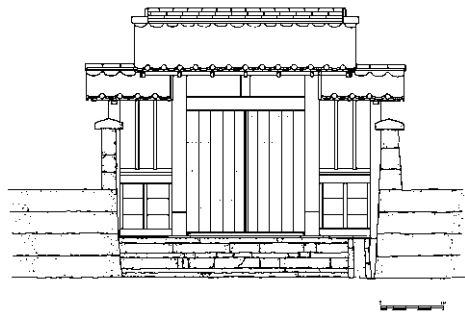


図3. 佐多直忠邸の腕木門。鹿児島県知覧町教育委員会（1993）による。

イヌマキの木を楽しむという二重の意味をもっている。母屋の裏側には、それぞれ畑をかかえている。屋敷の裏は低い石垣を巡らしてあり、石垣で屋敷の境界を囲っている。山が背後にせまる側は特に石垣は低い。この武家屋敷群の石垣は、鹿児島県知覧町教育委員会（1993）が詳細な分布図を仕上げ、それぞれの武家屋敷の母屋の図面も詳細に測量をし、報告している。

## 2.2 知覧に見られる石垣で作る門の形式

知覧では、公開されている屋敷のうち、石垣を曲げてカギ型にしてから母屋に向かう型が多い。この地方ではカギ型に曲がって入る形式について、特別な名称は付けられていない。知覧町の文化財課では、とりあえず「ます型」と呼んでいるという。石垣の門を入るところには、木製で引き戸の付いた屋根のある表門がある。これを知覧では腕木門（ウデキモン）と呼ぶ（図3）。この腕木門は主門の両側に少し低い屋根がつき、門の屋根が2段になるものをいう（鹿児島県知覧町教育委員会、1993）。西郷恵一郎（図4、写真1）、平山克己郎（写真2）の腕木門は、正面の主門の瓦屋根よりも引き戸を引いた両側部分が一段低い瓦屋根となっている。このように表門に戸のある腕木門があることが知覧の特色であり、この形式は琉球の石垣の表門には見られない。

表門を中へ入ると目を塞ぐかのごとくヒンブンが立つ。この地方ではヒンブンは屏風石と呼ばれている。ヒンブンを有する屋敷は本馬場通りで公開されている7軒の武家屋敷のうち次の3軒、即ち、平山克己郎、佐多直忠郎、森重堅郎であった。琉球でヒンブンと呼ばれているこの形式は、知覧ではすべて凝灰岩の樵石で作られている。平山克己郎では横幅3.7m、高さ約60cm、奥行き80cmで（図5）、その内側に約1.5mのイヌマキ、ツツジなどの生けこみがある。また、佐多直忠郎では凝灰岩の整層樵石からなり、ヒンブンの高さは1.7m、横幅3.3m、奥行き75cmである（図6、写真3）。この佐多家でもヒンブンの上には、内側を少し低くし、土を入れてあり、スイセンの植え込みをしてある。この地域のヒンブンは石垣島や沖縄、喜界島（漆原、羽田、2003）で見るヒンブンとは違って、必ず生垣と組ませたり、草本類を入れていて、単なる目隠しのための石の衝立ではない。知覧のヒンブンは琉球とは異なって、いずれも薩摩風のアレンジがしてあるところが興味をひく。屋敷囲いの石垣の隅角は陵を





写真1. 西郷恵一郎の石垣の門。ます型の石垣(喜界島では障子垣と呼ぶ)と、腕木門。



写真2. 平山克己邸。腕木門とます型門の石垣。さらに内側にイヌマキの生垣を伴ったヒンプンがある。



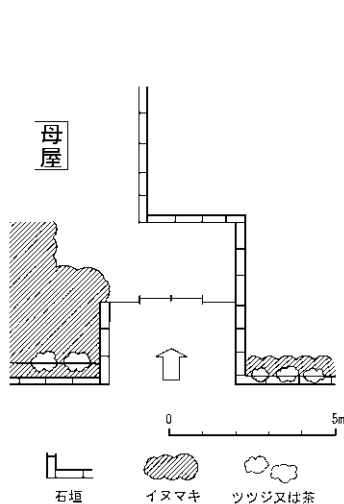


図4. 西郷恵一郎の石垣で作られたます型の門。

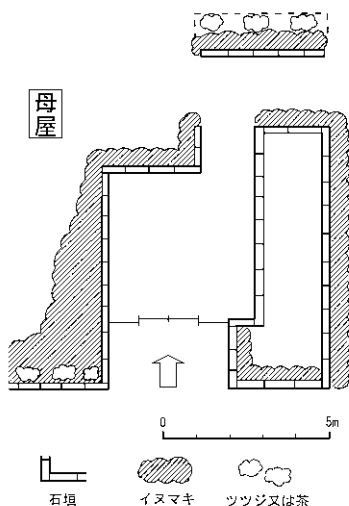


図5. 平山克己郎の石垣のます型門とヒンブ。

持った算木積みがほとんどである（写真4）。前報（漆原、羽田、2003）で示した喜界島や沖縄では、石垣の隅角は必ずしも陵が立つように組んでない。即ち、丸みを持った陵を有する石垣の隅角があるのが琉球の石垣のもう一つの特徴といえよう。本馬場通りの中間で1ヶ所大きくカギ型に曲がっていて、その曲がり角の突き当たりに相当する石垣には石敢當が埋め込んである（写真5）。これも琉球の文化・民俗が薩摩藩に影響したと見ることができよう。門には必ず屋根のある木製の戸のついた入り口があり、腕木門と呼ぶ。このような形式を持つのは、ここが武家屋敷であるので、格式が高い門として作ったのか、あるいは薩摩の独自の文化であるか不明であるが、少なくとも琉球文化圏には見られなかった特色である。

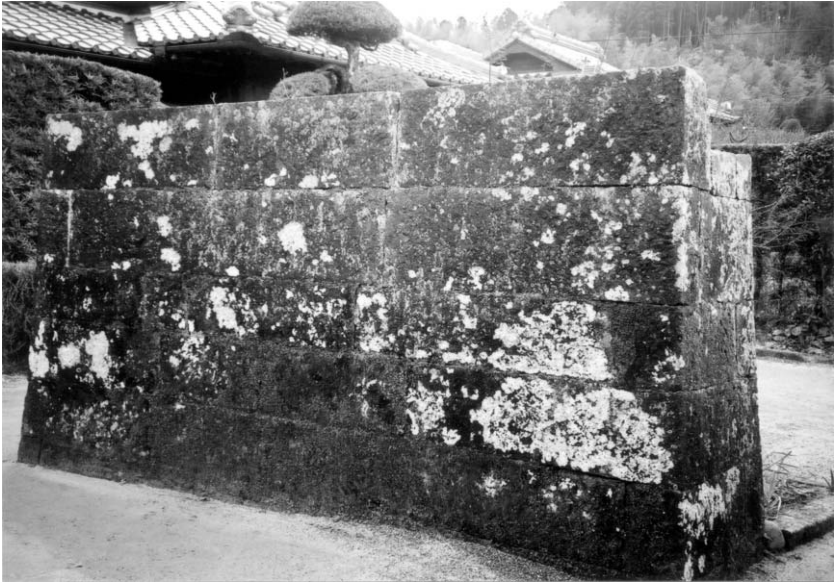


写真3. 佐多直忠邸の整層樵石で作られたヒンパン。母屋側は草本が生け込めるよう、土壌が入れてある。

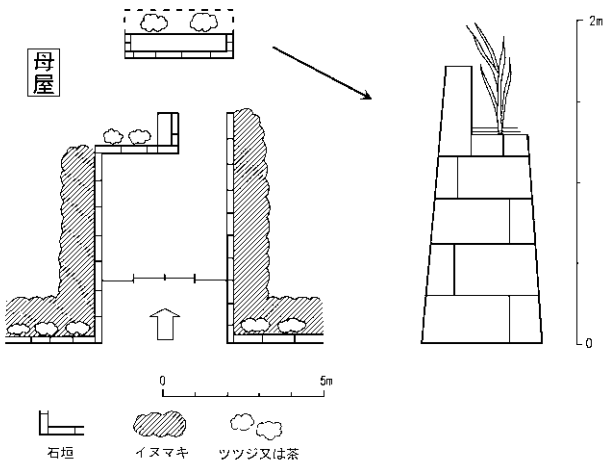


図6. 佐多直忠邸の石垣のます型門とヒンパン。

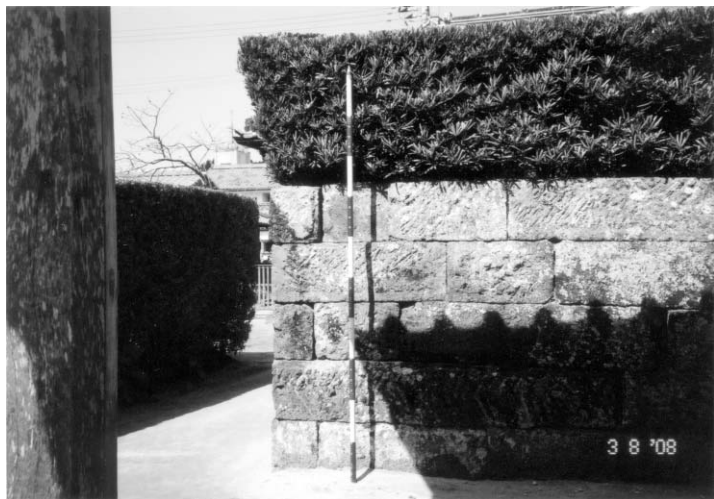


写真4. 石垣の隅角の算木積み。凝灰岩を用いた整層樵石。



写真5. 本馬場通りのT字路の石垣に埋め込まれた石敢當。琉球文化の影響が残る。

### 2.3 知覧における庭園

知覧の武家屋敷では、石垣の内側に生垣を利用した立派な庭園を有する。この庭園群を<sup>ふもと</sup>麓庭園と呼んでいるが、知覧麓庭園の作者については西田（1987）は琉球の庭師を招いて作らせたとするより、むしろ、中国の寧波の庭園によく似ると結論づけている。特に森家にみる池の中にアーチ型の洞窟石組をつくり、築山部に回遊できる園路が設けられている。これは琉球庭園にも共通する形式であるが、琉球では石灰岩を用いるところを知覧では甌穴石を用いている。作庭の意匠、技術、特に主景部における石組の構成法は、知覧、琉球、中国の間に類似点が多いとする。また門の形式にも目を向けており、「門から邸内に入ったところに切石積みの目隠しが設けられていて、知覧ではこれを屏風石と呼び、沖縄ではヒンプンという。」と西田は前述の論文で述べている。このように、石垣の門の形式ばかりではなく、庭園にも中国を源流とする琉球の様式が知覧の庭園に影響している。

鹿児島県知覧町教育委員会（1993）は、この庭園群について次のように述べている。知覧町に保存されている庭の多くは、大刈込と石組みが共存していることが特色である。大刈込の流行は、江戸初期から中期であり、知覧でも、江戸から遠く離れた地にありながら、その時期に取り入れたものと思われる。作庭年代が江戸中期であっても、各戸がそろって庭園を今日まで保存してきたことは、日本庭園史上、高く評価されて良い。

庭園についても、石垣同様地域差があり、文化景観の一つとして、取り扱う必要があると思われるが、今回は庭園の形式は十分調査していないので、考察を加えることができない。このプロジェクトでも将来的に、日本文化の地域による差を示す指標のひとつとして取り組んでいく必要があろう。

### 2.4 滋賀県大津市坂本の石垣

坂本は、石積みあのうのものの技術を持つ穴太衆あなはしの発祥の地であるとされている（田淵、1970）。またこの穴太衆が文献に出現するのは1577年の「兼見郷記」が初めてであるとされている。石積みの歴史は古く、坂本付近では、10世紀前半から中期の石垣が法華総寺院に残り、15世紀のものが同じ院の東塔内に残る。また、坂本の里坊に残る石垣群の多くは17～19世紀の成立と見なされている。また、

北垣（1998）は、「穴太の起源伝承は、江戸時代に著された「明良洪範」巻5の1節にあり、古くから石切り加工の上手が、穴太の里にいた。信長の安土城普請のとき、その石工たちが呼び寄せられ、石垣構築にあたった。以後諸国でも用いられたので、次第に石垣作りの上手になり、専業となった。今では、城郭石垣築城者といえば「穴太」衆として、その名は広く諸国に知られるようになった」と述べている。

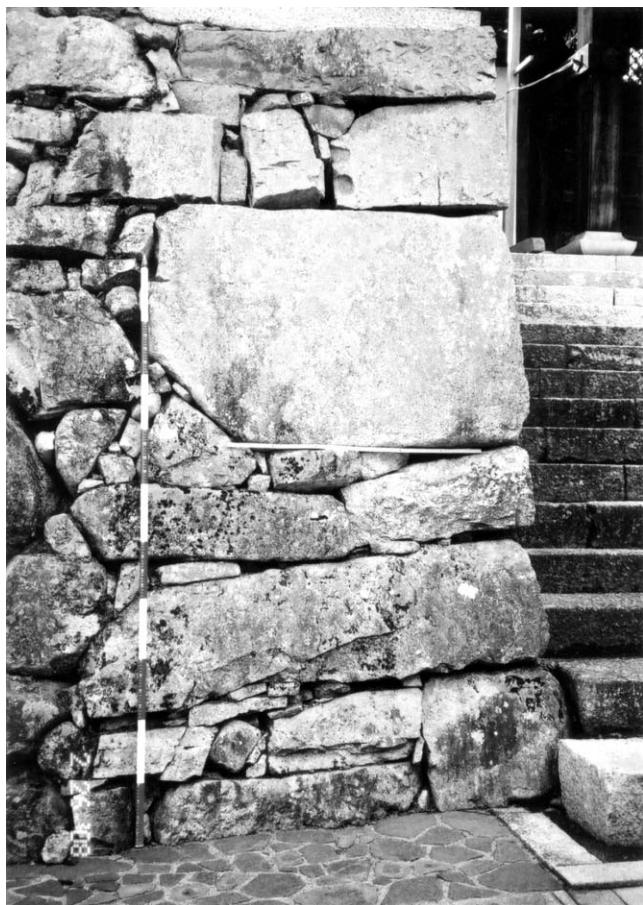


写真 6. 坂本における石垣の隅角の算木積み。大小の石を組み合わせた穴太積み。



1994年には比叡山延暦寺と坂本の石垣は、世界文化遺産に指定された。また石垣のある坂本は1998年には、国の名勝の指定も受けている。最澄が生まれた「坂本」は比叡山延暦寺が栄えてからできた地名であり、中世以来坂本には延暦寺の僧侶達が住み、門前町を形成していた。坂本は琵琶湖岸の扇状地上に立地する。従って、石垣を積むための石材には事欠かぬと土地条件を備えている。坂本の石垣に用いられている岩石は比較的固い中生代～古第三紀の火成岩や、砂岩、頁岩と中生代の黒雲母花崗岩からなる（地質調査所、1998）。穴太の石



写真7. 坂本における算木積み。石垣隅角の最下部に根石を見ることができる。

積みは、多少の面取りをした野石の大小を組み合わせ積んでいる。従って、石と石の間の空隙がかなり多い石積みの仕方である（写真6）。また、石垣の稜線は刃のようにシャープに仕上げ、必ず算木積みとなっている（写真7）。また隅角の最下部には必ず根石を伴い、この石の傾きで稜線の角度を決める。坂本の石垣は4mを越えることがある。高くなると、石垣には5度から8度くらいの角度ののりがつく。寺の石垣で高くなると、さらにそりがつくこともある。写真8には、2.8mの高さで、そりを有する石垣の上に、さらに白い壁の塀がつく滋賀院門跡を示した。また、隅角の算木積みの最下部には、内側に傾斜した要となる根石が埋め込まれている。この算木積みと、隅角ののりをつけるようになったのは、豊臣秀吉の本丸普請のころからとされている（北垣、1998）。

現在では、穴太積みの技術を継承し、伝統的な石積みができるのは栗田純司氏のみである（JR西日本、2004）。また、司馬遼太郎（1997）は、「最澄の死後、比叡山における建築物の造営は、平安期を通じて営々とつづけられた。そのために石垣技術は大いに発達し、その技術者たちが山麓の穴太に集まったかと思われる。「穴太衆」という独自の技術集団が形成され、新工夫がつぎつぎに出て、天下に知られるようになったに違いない」とある。1576年（天正4年）、安土城の築城の際、穴太衆を集め、石垣作成に起用したとされていて、戦国時代を経て多くの築城の機会があり、技術的にも高まり、石工の人口も増加したと考えられる。しかし、1657年（明暦3年）の江戸城の築城以後、本格的な城の石垣の構築はなくなり、石工はやがて全国に技術者として散っていったとされている。その間も近江坂本は石垣師の養成地としての役割を果たしていった。JR西日本（2004）によれば、石積みの技術は穴太衆の口伝として伝えられてきたといい、「石の声を聴き、石の行きたいところへ持っていけ」という言葉があると、栗田純司氏は語っている。

坂本の石垣の多くは、これまで検討してきた防風を目的とする屋敷囲いとしての石垣とは異なる。扇状地であるため、琵琶湖に向かって傾斜している地形に寺や里坊や住居をつくるために、平坦な地盤を確保する必要がある、石垣は土止めのために構築したものが多い。また、石垣の内側には屋敷林や生垣が組み合わされていることが多い。石垣と生垣を組ませた場合は、多分に目隠しの役割も果たしているが、塀としての立ち上がりはあまり高くなく、防風の効





写真 8. 滋賀院門跡の2.8 m高さの石垣。のりと若干のそりが施されている。



写真 9. 坂本の律院に見る穴太積みの障子垣。間口は3.1 m。内側で6.0 m幅。木造、瓦葺きの表門。

果を狙ったものではない。坂本では、安土、桃山時代に積まれた石積みが今なお崩れず使用されている。これは、石積みの技術が優れているばかりではなく、石垣に空隙が多いことも崩れにくくする要素となっていると思われる。生垣と組ませた生垣の樹木が根をはろうとも、石垣の間に適度な空隙があることと、空隙には土壌がないことが、石垣の中に樹木が根を十分にははることができず、根の力によって石垣が崩されることがないためであろう。

この穴太の石積みは、岡山城や金沢城をはじめとし、松本城、会津若松城、浜松城、和歌山城、広島城、福岡城、熊本城、洲本城、今治城、高松城、松江城、名古屋城、姫路城などの城の石垣でも見られる型である。坂本で見た穴太積みは、大きい石の間をとりわけ多くの細かい石で埋めているのが特色のように思う。前項の知覧では、隅角に算木積みを用いるが、石垣にそりや傾斜がないことが穴太積みと大きく異なる点である。

坂本の石垣の門の形式は、喜界島では「障子垣」と呼び、知覧では「ます型」と称されたカギ型に曲がる形式をもつ。坂本の律院における障子垣を写真9に示した。その内側の木製の表門の主門は扉を持ち、瓦屋根を伴う。この木製の門は、知覧で見た腕木門とは異なり、屋根は両側に小屋根はつかず、1つのみである。この木製の門は知覧とは明らかに異なり、地域差を有すると思われる。

### 3. 石垣景観の日本・アジアにおける意義

#### 3.1 調査地域の石垣のまとめ

文化景観として石垣をとらえた場合、次のような観点から、このプロジェクトの結論と見通しをまとめることができる。但し、限られた地域での研究から導き出しているため、今後の調査によっては修正を要する箇所が生ずるかもしれない。

- 1) なぜ屋敷囲いとしての石垣を作らねばならないのか、その分布はどの地域までなのか？
- 2) 石垣の作り方や伝統技法に地域差がないか？
- 3) 石垣の形式と住み方の違いに、文化があらわれるのではないか、また地域差がないか？

それぞれの項目に従って、まとめると以下のとおりである。

1) の項目について、日本文化の中で屋敷囲いとしての石垣をとらえるならば、日本以外の地域との比較をしてみることに、日本国内の地域差を明らかにすること、この2つの点から見る必要がある。後者は、2) と 3) でも論ずることができるので、この項では前者のみに限りたい。

日本の近隣諸国で、屋敷囲いとしての石垣が多用されている地域を見ると、少なくとも韓国の済州島の海岸部の強風地域がまずあげられる。火山島であり、石材に事欠かないことと、強風が卓越しているという自然条件に加えて、藁屋根で作られている民家が多いというもう1つの要素がある。従って、民家の屋根にも縄をかけ、藁屋根が強風によって飛ばないように固定している。

海南島には、石垣の屋敷囲いは皆無であった。海南島の東側の沿岸は台風が直撃するが、集落はきわめてわずかである。集落がある内陸側は、台風が影響する範囲からはずれる。従って防風効果の高い石垣は不要と思われる。台湾では、少なくとも東シナ海沿いには、屋敷囲いとしての石垣はほとんど見られない。しかし、澎湖島には強風を避けるための石垣が分布する。

東南アジアでは、インドネシアのジャワ島、バリ島は火山島であり、豊富な石材があるにも関わらず、石垣は棚田の土止めに用いている場合はあるが、屋敷囲いとしては用いていない。母屋のまわりには、屋敷林として有用樹木やココナツなどを植えている。これらの島々は台風の移動する範囲から外れているので、強風は稀である。むしろ石材は、ボロブドールの仏教遺跡や、パランパナンのヒンズー教寺院や、石碑を作るなどのように、特別な宗教的目的の場合に用いるが、民家や民家の周りの屋敷囲いには、用いていない。民家はラテライト（日干しレンガ）または、ラトソル（熱帯土壌）を低温で焼き上げたレンガのブロックを用いる。水田や畑でわらをかけて焼き上げたり、簡単なカマで焼き上げるか、または一週間天日にさらすだけで、石同様にかたいブロックを作ることができる。そのレンガを民家にも用いている。従って、家そのものが相当の強風に耐えうる。このことが、石垣を屋敷囲いとして用いる必要性をなくしているのだろうと思われる。

日本の中では、南西諸島のサンゴ礁の分布する屋久島以南の島々では、従来サンゴ石灰岩の石垣を屋敷囲いとしてきた。しかし、自然保護の立場から1973

年ごろからサンゴ石灰岩を海岸から自由に採石することが許されなくなった。石垣がコンクリートブロックに変化した今日、どの島でも石垣が分布したという戦前の様子は知りたい。また戦争によりサンゴ石灰岩の石垣が焼けたところは生石灰となるため、粉々になり、石垣を積み直す必要があった。戦後、特に1960年代以降、多くの集落がブロック塀に変わってしまっている。沖縄本島では、主として過疎の目立つ集落や、離島でのみ石垣が残る。石垣がブロック塀に変わる時、多くの藁葺き屋根がトタンや瓦に変わっていった。戦後の変化の中で、むしろ石垣がなぜ残ったのか、どのような条件の集落に残るのかを考察することが必要である。また、石垣が残った集落であっても、海岸からの距離や屋根の材料が何であるかによって、石垣やブロック塀の高さが決まっていることもわかった（漆原、羽田、2003）。

現在のところ、南西諸島と台湾の澎湖島や朝鮮半島の済州島は、少なくとも台風の経路にあたる強風域であって、藁屋根であったことが石垣を必要としたと結論づけることができよう。台風の経路からはずれる東南アジアは、少なくともレンガ作り、瓦屋根、またはシュロやヤシの葉の屋根であっても、高い樹木で屋敷囲いをすることで、防風ができるため、石垣が不要であったと考えられる。

## 2) 石垣の作り方の伝統的技法における地域差

屋敷囲いとしての石垣の伝統的方法を国際日本学第1号では、喜界島に限って見た。その中で、琉球に属した時代にすでに城の石垣の補修のため、奄美からも労働力の供給があったとされている。従って、琉球の石積みの方法を学んで帰島した人々がいたことが想像される。喜界島の屋敷囲いとしての石垣は、戦後まもなくはまだ石工が島にいないので、奄美大島に石工を求めた。しかし、昭和20年代末から30年代には、本州で石積みの訓練をした石工が島にも住むようになり、門などの技術的に難しい箇所は石工に頼み、長い塀の部分はユイで労働力を確保し、積んだ。サンゴ石灰岩からなる野石積みは、海岸からの距離が近い強風域はきわめて高く、2.7mであり、最高は3.6mであった。

喜界島で見る限り、石垣隅角は必ずしも直角に曲げていない。つまり多くの家々の隅角は直角ではなく、少し丸みを帯びている。従って隅角を算木積みにする必要がない。この形式は琉球に残る多くの城の石積みにも共通するもので

ある。すなわち、琉球としての独自の石積みの技術と形式があり、その手法が喜界島にも伝わったと思われる。

本研究では、薩摩藩に属した屋敷群を持つ知覧の石積みと、穴太の石積みの技法をみて、南西諸島のそれとの比較を試みた。喜界島の石積みの近年のものはかなり本州の技法が混在していると思われ、門の角は樵石を用い、算木積みにし、陵を際立たせている。しかし、町並みを構成するそれぞれの家の隅角は角が丸みを帯び、上記のように曲線を描いて曲がる。従って、隅角は算木積みになっていない。知覧の家々の隅角は約90%以上が直角で、樵石を用いてきれいに算木積みをしている。

坂本の穴太積みは本州域の城、寺院仏閣の塀に典型的に用いられ、自然石を部分的にかち割り、隅角を陵をたたせ、算木積みにする。さらに石垣の高度が高くなる寺ではこの陵にのりと、そりが付く。この方式は少なくとも知覧の積み方とは一致しない。今後穴太積みの分布範囲特にその南限を、本州域で詳しく調べる必要がある。

### 3) 石垣の形式と住み方

屋敷囲いとしての石垣の形式の地域差は前述のように隅角が直角（穴太、知覧）である場合と、曲面をもちながら曲がる南西諸島の形式がある。この他に石垣の門の形式にも琉球の方式と知覧、坂本のそれぞれに違いがあった。すなわち、図7に見るように、ヒンプンは琉球で用いられる形式である。しかし、琉球のヒンプンは石垣の上に植生は入れない。知覧ではヒンプンが用いられるが、ヒンプンの石積みの上に植物を入れたり、内側に花木の生け込みを入れて、デコレーションをする。すなわち、薩摩風のアレンジが入る。このヒンプンは、坂本には全くない。さらに、喜界島で昨年度報告した障子垣は、知覧ではます型の門と便宜的に呼ばれているが、少なくとも薩摩の文化が喜界島にまで及んだためと考えられる。このカギ型に石垣を曲げて入る石垣の形式は、沖縄や、八重山では一般的な門の形式ではないが、坂本の里坊ではきわめて多く見ることができた。この石垣の門の形式は、現在のところ調査不足でその北限は不明である。知覧では、石垣の門を2〜3m入り込んで母屋までのところに、腕木門が付く。この腕木門は、屋根が主門より1段低い小屋根を両側に伴う。この両側は引き戸を引いて開いている時の戸の収納の場である。これは知覧独自の形

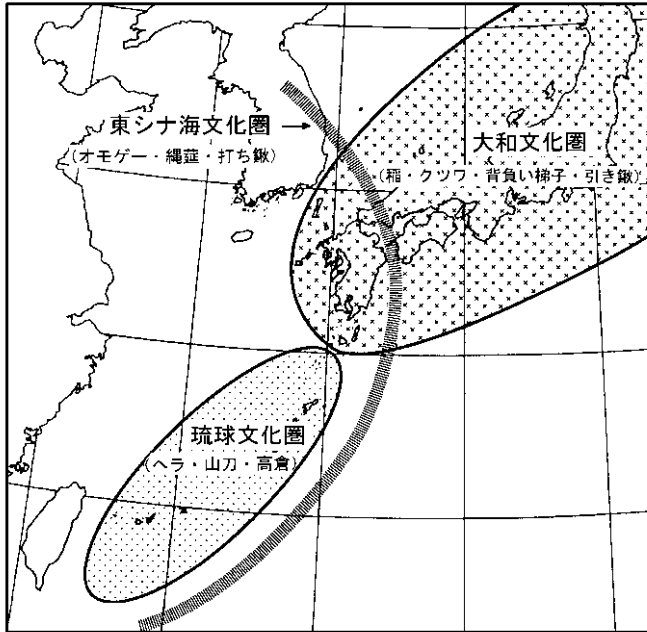


図7. 琉球文化圏、大和圏と東シナ海文化圏の領域。下野（1980）を一部編集。

式である。しかし、障子垣を伴った坂本では、腕木門はなく、引き戸が付くが主門のみである。石垣の屋敷囲いは知覧と坂本は同じ障子垣とはいえ、木製の門の付け方の形式が違い、住み方が異なっているように思われる。

以上のように、屋敷囲いとしての石垣は、それぞれの地域の風土を反映するものであり、地域固有の文化を表す指標として用いることができると考える。今後日本各地の石垣の比較をするとともに、さらに石の文化を有するヨーロッパ諸国との比較も試みる必要があるであろう。

### 3.2 日本・アジアにおける石垣から見た文化領域

文化領域を大林（1986）は多くの文化要素を共有していて、他の地域と違うことが明らかになるような領域と規定している。文化圏とは異なるものと述べているので、原文の抜粋は以下のようにあげた。大林（1986）は「風土と文化」の第二章「日本の文化領域」で「文化領域」という用語に関して以下のように



述べている。

「文化圏という用語は使わないことにしたい。文化圏は民族学においては、かつてのドイツ、オーストリアの歴史民族学において用いられた特別の意味内容があり、それを避けるためである。文化圏とは特定地域に特徴的に見出され、かつ文化のすべての分野にわたっての諸文化要素が集まってできた複合体のことである。…「文化領域」とはculture areaの訳語なのである。この意味での文化領域には、その領域内の多数の社会が多く類似した文化要素を共有していることが、他の地域と比べた時に明らかになるような領域である。…この領域内に特徴的な文化要素を共有していればよい。」

従って、屋敷囲いとしての石垣の特色から、地域差を明らかにし、その分布領域を見出そうとする本研究の手法は、この大林（1986）で述べた多くの文化要素のうちの1つにすぎず、他の文化要素と合わせて、最終的に総合判断していかなければならないものと考ええる。

一方、下野（1980）は南西日本～南西諸島の地域を図7（簡略化して示した）のように、民俗学的事象から検討し、琉球文化圏、大和文化圏の2つに分けている。下野（1980）の大和文化圏と琉球文化圏の定義は以下のものである。「大和文化圏が冬正月であるのに対し、琉球文化圏は夏正月（<sup>あらせつ</sup>新節、収穫祭）であり、また大和文化圏は稲作に基礎を置き、箕、引き鋤、クツワ、背負い梯子、櫓などの民具を使用するのに対し、琉球文化圏は芋作、<sup>あわ</sup>粟作に基礎を置き、サンバラ（非箕）、打ち鋤、オモゲー（クツワと馬の頭を結ぶ紐と馬の鼻の上に八の字型にかけた二本の制御棒）、ティル（額帯運搬背負籠）（背負い梯子欠如）、<sup>かい</sup>櫓（櫓は使わない）などの民具を使用するという明白な対比を見ることができる。」さらに、九州、南西諸島から韓半島に至るまでを、オモゲー、打ち鋤から、東シナ海文化圏とし、分布をえがいている。文化圏とするのか文化領域とするのかは、文化を構成する諸要素を見極めねばならず、石垣の研究のみからは文化圏と文化領域のいずれを用いるべきか判断しがたい。しかし、石垣の門の形式をもとに図8に示したヒンプンの領域は、下野の琉球文化圏より北の九州南部までである。障子垣の分布は、現在までの調査では少なくとも喜界島までを南限としている。少なくとも下野の琉球文化圏、大和文化圏の明瞭な境界とは一致していない。屋敷囲いとしての石垣は、明瞭な境界を持つもの



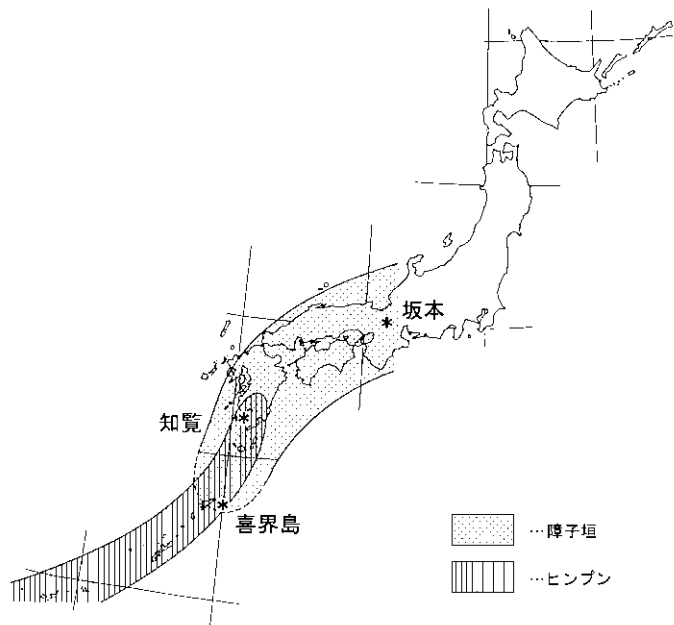


図8. 西南日本と南西諸島におけるヒンプンと障子垣(ます型門)の分布。

ではなく、境界付近では技術や、形式を一部応用しつつ、他地域のそれを取り入れていくものではないかと考える。

将来的に下野の提案した東シナ海文化圏も視野に置き、残された問題として、韓半島の石垣の技術、形式の対比が必要と思われる。

## 謝 辞

2003年度の現地調査を行なう際、次の方々に御世話になり、種々の便宜をはかっていただいたことを感謝します。

知覧武家屋敷庭園保存会、事務局長 江平美潮様と知覧町教育委員会文化保存課、指定文化財係 若松重弘様には知覧町の武家屋敷の説明と歴史についての御説明をいただき、また資料の提供をいただいたことを記して感謝します。また、2003年度は喜界町小野津集落の調査も続行したが、今回調査未了地域があり、この報告書にその内容を含めることができなかった。2003年度の現地調

査での各種の便宜をはかっていただいた喜界町役場観光課課長 嶺田一成様に深く感謝します。現地調査では測量の補助をして手伝っていただいた、法政大学大学院修士課程2年羽田麻美さんにも記して感謝します。

#### 参考文献

- JR西日本 (2004) : Blue Signal. Vol.93, 19p.
- 鹿児島県知覧町教育委員会 (1993) : 知覧麓の武家屋敷群、伝統的建物群保存地区保存対策調査報告書 (改訂版). 287 p.
- 北垣 聡一郎 (1998) : 石垣普請. ものと人間の文化史58. 法政大学出版局, 415.
- 小林 昌人秀夫 (1995) : 民家と風土. 岩崎美術館. 421 p.
- 西田 政善 (1987) : 知覧麓庭園の作者に関する考察. 知覧文化, 知覧町立図書館, 24, pp7-20.
- 大林 太良 (1986) : 第2章日本の文化領域. 日本民族文化大系。「風土と文化－日本列島の位相－」. 小学館. 177-228.
- 大城 直躬 (1995) : 都市の歴史とまちづくり. 学芸出版. 256 p.
- 佐々木 博 (1978) : 風土と景観. 山田 英雄編: 風土論序説. 国書刊行会. pp91-122.
- 司馬 遼太郎 (1997) : 叡山の諸道 街道をゆく16. 朝日文芸文庫, 朝日新聞社. 242p.
- 下野 敏美 (1980) : 南西諸島の民族. 法政大学出版局. 547 p.
- 田淵 実夫 (1970) : 石垣. ものと人間の文化史15. 法政大学出版局. 214 p.
- 地質調査所 (1998) : 京都東北部地域の地質. 地域地質研究報告 5万分の1地質図幅, 京都 (11) 第28号, N1-53-14-2, 82 p.
- 漆原 和子・羽田 麻美 (2003) : 屋敷囲いとしての石垣を作る文化－喜界島, 阿伝集落の例－. 国際日本学, 1, 139-168.
- 吉野 正敏 (1978) : 風土と気候とクライメイト－その概念の変遷－. 山田 英雄編: 風土論序説. 国書刊行会. 9-30.
- 和辻 哲郎 (1969) : 風土. 岩波書店. 253 p.